

グリム童話「ルンペルシュティルツヒェン」の明治期から大正期の翻訳

Translations of “Rumpelstiltskin” in the Meiji and Taisho Eras of Japan

野口 芳子

NOGUCHI YOSHIKO

要旨

明治期から大正期の間はこの話の邦訳は合計7話出版されている。そのうちドイツ語から訳されたものは2話、英語訳からは3話、ロシア語訳からは1話、底本が不明のものは1話である。改変箇所は英語訳の影響を受けたものが多く、ドイツ語原典に忠実な訳は1話しか存在しない。

小人の名前については、ドイツ語の名前を使っているものが2話、ロシア語の名前が1話、日本語の名前が4話ある。名前を当てられた小人は最後の場面で体を引き裂くのではなく、片足で跳んで逃げると改変されているものが多い。これは底本に使用された英語訳に施された改変である。

日本人訳者によって行われた改変は、生まれた赤子の性別を男性にしたことである。ドイツ語の原典では「最初に生まれた子」としか表現されていないのに、多くの日本語訳では「王子」にされている。1873年の太政官布告263号で貴族や華族に対して長男の家督相続が日本史上初めて法的に明確化された。そのような日本の社会状況がおそらく改変に反映されたのであろう。

Abstract

Seven translations of “Rumpelstiltskin,” one of Grimm’s fairy tales, can be identified from the Meiji and Taisho eras. Two of them were translated from German, three from English, one from Russian, and one from an unknown source. Nevertheless, most of these translations were influenced by the English version and only one is faithful to the original German story.

Two stories use German names for the dwarf, one uses a Russian name, and four use Japanese names. In many of the stories, the dwarf whose name is guessed is not torn into half; instead, he jumps on one leg and runs away in the final scene. This is a change made in the translations that used the English version as the original text.

A new change incorporated by the Japanese translators is clearly mentioning the gender of the baby born as male. In the original German text, it is only described as “the first-born child,” but in many Japanese translations, it is “the prince.” In 1873, the Grand Council of State Proclamation No. 263 legally clarified the inheritance of the eldest son to the nobility and noble families for the first time in Japanese history. This social situation was probably reflected in the changes incorporated in the Japanese translation.

Key Words

グリム童話 ルンペルシュティルツヒェン 日本での受容 明治期から大正期 翻訳者

Grimm’s Fairy Tales, Rumpelstiltskin, Reception in Japan, Meiji and Taisho Eras, Translators

序論

グリム童話 KHM55¹「ルンペルシュティルツヒェン」(Rumpelstilzchen)は、名前を当てられると、魔力を失う小人の話である。この種の話の類話は『国際昔話型カタログ』では ATU500「超自然の援助者の名前」の項目に分類されており²、英語名では「トム・ティット・トット」(Tom Tit Tot)、フランス語名では「リクダン・リクドン」(Ricdin Ricdon)としても知られている³。

この話が日本語に訳されると、小人の名はどのように改変されるのだろうか。先行研究としては西口拓子が 2012 年の論文で、1906 (明治 39) 年に橋本青雨が「珍五郎兵衛」、1948 (昭和 23) 年に森於兔が「癡杖子 (はいじやうし)」と訳していることを指摘している⁴。しかし、その他の訳者がどのように訳しているのかについては触れていない。西口の論文が発表される 12 年前に、筆者は川戸道昭、榎原貴教との共著『日本におけるグリム童話翻訳書誌』(2000 年)で⁵、この話は明治期に 3 話存在することを明らかにし、翻訳者、題名、翻訳年などの書誌情報を提供している。大正期における翻訳数や翻訳内容についての情報を提供する先行研究は存在しないので、本論が嚆矢となろう。そもそもこの話は明治期から大正期を通じて何回訳されているのであろう。また翻訳者は誰で、どのように訳されているのであろう。本論の目的は、上記の事項を明らかにし、その後、改変箇所を焦点を当てて、改変理由について考察していくことである。

第1章 グリム童話 KHM55 「ルンペルシュティルツヒェン」(決定版 1857 年)

1. あらすじ

貧乏な粉ひきが、王に目をかけてもらうため、自分の美しい娘は藁を金に紡ぐことができると嘘をつく。王は娘を城に連れて行き、藁が一杯入った部屋に入れて金に紡ぐよう命じる。明日までに紡がなければ命を取ると言う。娘が泣き出すと、小人が現れて、首飾りをくれたら紡いでやると言う。翌日、王は藁が金に紡がれているのを見て喜び、もう一日紡ぐよう娘に命じる。娘が泣き出すと、また小人が現れて、指輪をくれたら紡いでやると言う。翌日、王は藁がすべて金になっているのを見て大喜びし、もう一晚金に紡いだら、妻にしてやると言う。娘が泣き出すと、また小人が現れて、生まれてくる赤子をやると約束したら、金に紡いでやると言う。王が来て、藁がすべて金になっているのを見て、娘を后にする。1 年後、后が赤子を産むと、小人が来て、約束どおり赤子を渡せと言う。娘があまりに悲しむので、3 日間待ってやる。その間に小人の名を当てたら、子どもは連れて行かないと言う。后は様々な名前を言うが、すべて当たらない。家来が森の小さな家の前で、小人が焚火の周りを踊りながら「おいらの名前がルンペルシュティルツヒェンだなんて誰も知らない」と叫んでいたと知らせる。后がその名を小人に言うと、小人は怒って、「悪魔が吹き込んだな」と言って、左足を掴んで、自分の体をまっぴたつに引き裂いてしまう⁶。

2. グリム兄弟による採集方法と版による改変について

1) 採集方法と語り手

この話の初出はヤーコプ・グリムがヘッセンで口承収集したものを、1808 年 4 月に恩師サヴィニユー (Friedrich Carl von Savigny 1779-1861) に手紙で送ったものである。その内容が 1810 年の初稿 (エーレンベルク稿) の 42 番目に収められている⁷。1812 年の初版ではカッセルのヴィルト家の娘ドロテーアとハッセンプフルーク家の娘が語った 2 種類の話が混成されている⁸。第 2 版以後、カッセルのヴィルト家の娘リゼッテが語った話を採用して、結末部分が強烈な内容に改変される⁹。第 3 版か

ら第5版までは第2版の内容がそのまま踏襲されるが¹⁰、第6版で話の冒頭部分に少し文章が追加され¹¹、その内容が第7版の決定版まで踏襲される。

2) 版による改変の内容

(1) 初稿のあらすじ

昔々、小さな娘がいた。その娘が麻を紡ぐと、金の糸ばかりでてきて、麻糸はでてこなかった。3日間紡いだが、金の糸しか出てこなかった。娘が嘆いていると、小人が現れて助けてやると言う。間もなく、プリンスが来てお前を連れ去るだろう。もし、おまえが最初に産む子をおれにくれると約束するなら、力になってやると言う。娘が約束すると、すべて小人の予言通りになる。後は男の子を生む。小人が現れて子どもを連れ去ろうとする。后が懇願すると、小人は3日の間に自分の名前を当てたら連れて行かないと言う。召使の女(Dienerin)が森で聞いた「ルンペンシュトゥンツヒェン」(Rumpenstünzchen)という名前を后が言うと、小人は驚いて、悪魔が入れ知恵したにちがいないと言って、料理用の玉しゃもじ(Kochlöffel)に乗って、窓から飛び出す¹²。(下線は筆者による)

(2) 初版のあらすじ

貧しい粉ひきには美しい娘がいた。王と話す機会があり、粉ひきは自分の娘は藁を金に変えることができると嘘を言う。娘が泣き出すと、小人が現れて仕事を代行してくれる。(その後の内容は決定版とほぼ同様)王が狩場で出会った小人の名前を後に教える。後は小人に、おまえの名前は「ルンペルシュティルツヒェン」(Rumpelstilzchen)だと言うと、小人は悪魔が入れ知恵したなどと言って、怒り狂って走り去り、二度と戻って来ることはなかった¹³。(下線は筆者による)

(3) 第2版、第3版、第4版、第5版のあらすじ

初版とほぼ同じ内容だが、第2版で改変された内容が第5版まで踏襲されるのは下記の3箇所である。娘を後にすると宣言してから、「王は、この娘より金持ちの女はこの世にいないと考えたからだ」と娘を娶った理由を付加した箇所、后が小人に王国の宝物をすべて差し出すと言うと「世界中のどんな宝物より、生きているもののほうがいい」と小人が答える箇所、后が小人の名前を言い当てると、小人は悪魔が入れ知恵したなどと言って大声で叫び、怒りのあまり、右足であまり強く床を踏みしめたので、腹のあたりまで地面にめり込んでしまった。それから、左足を両手で掴んで、自分の体をまっぶたつに引き裂いたという箇所である。(下線は筆者による)

(4) 第6版、第7版(決定版)のあらすじ

第6版で付加され、その内容が第7版まで踏襲されるのは下記の箇所である。粉屋が王に自分の美しい娘は藁を金に紡ぐことができると言ったのは、「王に目をかけてもらうため」(um sich ein Ansehn zu geben)であると、嘘をついた理由が付加された箇所である。

3) 版による改変のまとめ

初稿では本当に麻糸を金糸に紡ぐ娘がいて、小人の予言でその娘が王の妻になるという話である。初版から2種類の話が混成される。その結果、自分の娘は藁を金に紡ぐことができると王に嘘を言う粉屋の話になる。生まれてくる子どもは初稿では王子だが、初版以降では性別不明の「最初に生まれ

た子」に変わる。名前を当てられた小人は初稿や初版ではそのまま逃げ去るだけだが、第2版からリゼッテ・ヴィルトの話が入れられ、怒った小人は自分の体をまっぴたつに引き裂くという内容に改変される。第6版では粉屋が王に嘘をついた理由「王に目をかけてもらうため」が挿入される。その他、後に名前の情報をもたらすのは、初稿では「召使の女」で女性であったが、初版では王になり、男性に変わる。第2版以降決定版まですべて男性の使者になっている。第6版から挿入された、粉屋の父親が嘘をついた理由「王に目をかけてもらうため」は、何とも不自然で解せない理由である。なぜなら、その嘘によって娘が殺されてしまうかもしれないからである。この部分は日本ではどのように受容されているのだろうか。次章では、この話が日本では、いつ、誰によって、どのように訳されたかについて、年代順に見ていく。

第3章 明治期から大正期に翻訳された「ルンペルシュティルツヘン」

1. 翻訳一覧

- 1) 1891 (明治24)年7月 愛柳子譯「黄金のわら」『幼年雑誌』1巻13号 博文館
- 2) 1902 (明治35)年12月 山君譯「小人の名」『萬年艸』3巻 萬年艸發行所
- 3) 1906 (明治39)年3月 橋本青雨譯「珍五郎兵衛」『獨逸童話集』大日本國民中學會
- 4) 1916 (大正5)年5月 中島孤島譯「ルムペルスチルツヘン」『グリム御伽噺』富山房
- 5) 1916 (大正5)年7月 新井弘城譯「小坊主物語」『幼年百譚 お話の庫』夏の巻 博文館
- 6) 1918 (大正7)年8月 南部修太郎譯「小人の謎」『赤い鳥』1巻2号 赤い鳥社
- 7) 1924 (大正13)年8月 金田鬼一譯「がたがたの竹馬小僧」『グリム童話集 第一部』世界童話大系 第2巻独逸篇 世界童話体系刊行會

2. 翻訳の内容と翻訳者

1) 愛柳子譯「黄金のわら」『幼年雑誌』収録

この話が日本で最初に紹介されたのは、1891 (明治24)年7月である。雑誌の正式名は『尋常小學 幼年雑誌』で、その第壹巻第拾參號の「遊びの庭」欄に「黄金のわら」(西洋木版)という題名で収録されている。冒頭は次のように始まる。

今こゝに説き出す漸しは少しく荒唐無稽の恐れあれども 修身談にもと思ひこゝに譯しぬ
 百日の説法屁一つとは是等の事を云ふならん。また頭かくして尻隠さずとは
 むかし或國にいと憐れなる水車師ありけり 唯一人の美しき女を持ちしが 己れの餘り貧な
 るものから 利益を得んが為めに 時の王に申上げて
 我女は容貌の美なるのみならず 又 糞より金を引き
 延ばす魔術を有せりと披露しければ 王は喜びてそは
 いと興ある才藝なり…明日早速我宮殿に携へ来よ直ち
 に試験すべしと言ひ賜へり (35) 14



【図1 画家不明 愛柳子訳】

原典¹⁵⁾にない2行の冒頭句が加筆されている。粉屋(Müller)は水車師(みずくるまや)と訳されており、彼が王様に嘘をついた理由は、原典では「王に目をかけてもらうため」だが、

ここでは「餘に貧なるものから 利益を得んが為め」である。単に、見栄を張っただけの父親が、貧乏ゆえの窮余の策として娘を売り渡す父親に変えられているのである。小人が現れて、首飾りをくれたら代わりに仕事をしてやると言う。ここでは小人は「小さき人」と訳されたり、小人や侏儒と書いて（いっすんぼうし）とルビが振られたりしている。3回目に小人は仕事の報酬として娘に「最初に生まれた子」を要求するのだが、ここでは「第一の息子」になり、男と限定されているのである。原典では初稿以外すべての版で、子どもの性別についての記載はない。小人の名前は「ランプイルステルトスキン」になっているが、おそらく、これは英語の“Rumpelstiltskin”の読み方をカタカナ表記した結果であろう。最後の箇所はここでは「両手にて左の足に攫み付き右の足を挙げんとしければ余りのはげしさに あはや右の足は地中より切截たりければ侏儒は遂にうなりつゝ 飛び去りたり」となっている。自ら体を真っ二つに引き裂くという原典の表現が、足だけちぎれて、喚き声をあげて立ち去ったと改変されているのである。（下線は筆者による）

翻訳者は筆名が愛柳子で、本名は坂下龜太郎（1870-1907）である。博文館で『幼年雑誌』の主筆を務めてから¹⁶、巖谷小波の部下として『少年世界』の編集に従事する。小学生向けの読本『絵入幼年読本』や『絵入幼年歴史』など文系の著書だけでなく、『絵入理科読本』や『簡易物理学』などの理系の著書も多く、両分野に造詣が深い人物であったと思われる。37歳という若さで夭折したためか、坂下については新潟県出身ということ以外¹⁷、学歴や経歴についての詳細は不明である。

坂下はこの話をおそらく英語版から重訳したのであろう。なぜなら、上記下線部の文章が、ウェーナーナート（E. H. Wehnert 1813-1868）の英訳版の表現、“His right came off in the struggle, and he hopped away howling terribly”と同じ内容だからである¹⁸。

2) 山君譯「小人の名」『萬年艸』収録

2番目の邦訳は「小人の名（一名癡杖子）」で、1902（明治35）年12月発行の雑誌『萬年艸』第参巻に山君譯として収録されたものである。冒頭はかなり改変された訳文で始まる。

昔獨逸の寂しい片田舎に、貧乏な百姓が、一人の娘を相手に、心細く世を送って居た。或る饑饉年に、百姓は一人でも暮しかねるのに、その娘が生まれつき大の無精もので、何もせぬゆゑ、百姓はもてあまして、いつその事此娘を川か山へでも連れて行つて、殺してしまはうかとも思つたが、もしそれが露れて、自分が國法に問はれてはならぬと、それは思ひとどまつた。扱¹⁹いろいろ考へ直した揚句、娘を國王の處に奉公させる事に極めた。（24）

原典では「粉屋」（Müller）であるが、ここでは「貧乏な百姓」である。原典では父親は「王に目をかけてもらうため」に嘘をつくののだが、ここでは飢饉を乗り切るための子捨てとされている。「美しい」娘が「大の無精もの」の娘に変えられ、王宮に奉公に出して厄介払いされるのである。連れて来られた娘を見ても、原典では王は「無言」であるが、ここでは王は「成程、これはかしこさうな女だ。今夜一つ試して見やう」と言う。小人は報酬として原典では1日目は「首飾り」を、2日目は「指輪」を要求するが、ここでは一度に「指輪と首飾り」を要求する。原典では3回の繰り返しがあるが、ここでは2回の繰り返しで終わる。3回目に小人が要求するものは、原典同様「一番初めに生む子」とされているが、小人の歌では「王子」を連れて帰るとなっているので、「赤子」はここでも「男の子」が想定されている。小人の名は「癡杖子^{はいじやうし}」という。最後は「そこで両手で左の脛を持ち上げて、真ん

中からぼつきと折つてしまつた」となっており、原典とは異なる表現になっている。

訳者、山君は森鷗外の息子、森於菟（1890-1967）である。彼は当時12歳で、獨逸学協会学校に通っていた生徒であった²⁰。「父が、夕方家に帰つて夕食をすませ書齋でくつろいでいるところへ私が譯文をもつて行くと、父はすぐ筆をとりレクラム版の原書と照し合わせながらいねいになおしてくれた」と述懐している²¹。さらに「父が筆を入れると文章がずつと短くなり、それでいて意味ははるかにはつきりするのがつねであつた」と書き、『萬年艸』の「小人の名」は父鷗外に添削してもらったものであると明記している²²。訳文に加えられた加筆や改変は、西口も推測しているように²³、おそらく鷗外によるものであろう。

3) 橋本青雨譯「珍五郎兵衛」『獨逸童話集』収録

3番目の邦訳は「珍五郎兵衛」で、1906（明治39）年3月出版の『獨逸童話集』に収録されている。冒頭は次のように始まる。

昔、ある國に、大相美しい娘を持つた、一人の粉屋がありました。容色が好い上に、諸事に行届いで、誠に伶俐な娘なものですから、粉屋の自慢は一通りでなく、ある時、王様に向つて、家の娘は藁から黄金を紡ぎ出す事を知つて居りますなど、跡方もない法螺を申上りました所が、王様は非常に欲張つた方ですから、これは旨い事だと思召し、早速娘を召連れ参るやう、粉屋に申付けられました。（179）

原典では娘は美しいだけだが、ここでは諸事に行き届いて利発な娘にされている。原典では娘は王に「できない」とは言わないが、ここでは「娘は左様の事は私に出来ません、と云つて、再三お赦を願ひましたけれど」と改変されている。一寸法師が飛び込んできて、1回目は「頸飾」と引き換えに、2回目は「指環」と引き換えに、3回目は「最初に生れた子供」と引き換えに仕事を引き受けてくれる。原典では后が産むのは「子ども」（Kind）とのみ表記されていて、性別は不明であるが、ここでは「玉のやうな男のお子様」と明記されている。后が名前を「珍五郎兵衛」と当てると、

一寸法師は一生懸命に、両手に力を籠めて、辛つと其足を抜き取りました、其様子が如何にも可笑しいので、御殿中はドツと大笑ひ、一寸法師は其後二度と姿を見せませんかつたとき（185）

と大幅に改変されている。

訳者、橋本青雨の本名は橋本忠夫（1878 -1944）である。宮城県出身で1904年に東京帝国大学文学部独文科を卒業し、独文学を中心とする翻訳に従事し、イプセン、シラー、ハウプトマンなどの翻訳を『帝国文学』『新小説』『新声』などに掲載する。その後、中央大学教授となる。彼は童話の教育的価値を主張し、童話を教材の中心として扱ったヘルバート派の教育者である²⁴。

橋本はドイツ文学者であるのに、ドイツ語版ではなく英語版から重訳している。なぜなら、上記に引用した最後の場面の改変箇所は、グリム童話の最初の英訳者であるエドガー・テイラー(Edgar Taylor: 1793-1839)の英訳本“*German Popular Stories*”の内容と一致するからである²⁵

and dashed his right foot in a rage so deep into the floor, that he was forced to lay hold of it

with both hands to pull it out. Then he made the best of his way off, everybody laughed him for having had all his trouble for nothing (150)

そして激怒して突っ込んだ右足を床の奥から両手で引き出した。それから小人は、大変な仕事をしたのに、何の報酬ももらえなかったので、みなに笑いものにされた。(拙訳)

さらに、この本では娘は「美しい」(beautiful) だけでなく、「如才がなく賢い」(shrewd and clever) とされ、藁を金に紡ぐことなどできないと王にきっぱりと断る。

It was in vain that the poor maiden declared that she could do no such thing.(148)
 憐れな娘はそのようなことなどできませんと断言したが、無駄であった。(拙訳)

このことから、橋本訳における改変は彼自身の判断によるものではなく、底本に使用した英語本に加えられた改変であることが判明する。ただし小人の名前を「珍五郎兵衛」にした点と、生まれた子どもを男児にした点は²⁶、橋本によるものである。

4) 中島孤島譯「ルムペルスチルツヘン」『グリム御伽噺』収録

4 番目の邦訳は「ルムペルスチルツヘン」で、1916 (大正 5) 年 5 月出版の『グリム御伽噺』に中島孤島訳で収録されている。冒頭は次の文で始まる。

むかし或る所に貧乏な水車屋があつて、美しい娘を持つてみました。或る日此の水車屋は王様の前へ出ましたが、何か王様のお気に入りさうなことを言つて見度いと思つて、故意と自分の娘は藁から黄金の糸を曳出すことを知つてみると申上げました。(166)



貧乏な水車屋は、美しい娘を王様に売り込もうとして嘘をつく。粉屋は【図2 岡本帰一画 中島孤島訳】「水車屋」、小人は「矮人」と訳され、后が産む赤子はここでは「王子」と男児であることが加筆されている。后が名前を「ルンペルスチルツヘン」と当てると、原典では「悪魔が話したんだ!」というところが、「魔女が話したんだ!」と改変されている。体をまっぴたつに引き裂くという原典の表現は回避され、「右の脚が関節から抜けて、矮人は恐ろしい声で吠えながら、片足跳に跳んで行つた」とされている。

訳者、中島孤島の本名は中島茂一(1878-1946)で長野県出身である。彼は早稲田大学卒業後、坪内逍遙の門下生としてシェイクスピアを研究し、文学評論や海外文学の紹介などを新聞や雑誌に執筆する。主として海外の児童文学の翻訳に専念し、『模範家庭文庫』として『グリムお伽噺』、『続グリム御伽噺』を、岡本帰一の斬新な挿絵を入れて富山房から出版する²⁷。

中島はおそらく愛柳子の項で紹介したウェーナーの英訳本を底本として訳したのであろう。なぜなら、そこでは悪魔(devil)が魔女(witch)に変えられており、最後の場面も下線部で示した上記の中島訳と同じ内容、”his right came off in the struggle, and hopped away howling terribly.”に変えられているからである。

5) 新井弘城譯「小坊主物語」『幼年百譚 お話の庫』収録

5 番目の邦訳は「小坊主物語」で、1916（大正 5）年 7 月発行の雑誌『幼年百譚 お話の庫』夏の巻に新井弘城訳で収録されている。冒頭は次のような文で始まる。

むかし或所に、一軒の粉屋がありまして、其家には一人の賢い娘が居りました、或日のこと、粉屋の亭主は、王様の所へ出かけて参りまして、
『へい王様、恐れながら申し上げます、私の娘は夫れは／＼賢い女で御座いまして、藁を紡いで黄金に致します…』(1)

粉屋の娘は原典では「美しい娘」であるが、ここでは「賢い娘」になっている。「藁を紡いで黄金に致します」と父親が王に言うと、娘は「ハテ、私には逆も其様な藝当は致し兼ねます、どうぞ此の事ばかりはお容し下さいます様に…」と訴えるところは、橋本訳とよく似ている。小人は「小坊主」と訳され、娘の方から小坊主に「若しこ子供が出来たら、夫れをお前に上げよう」と言う。生まれた子の性別については原文同様、記載がなく「玉の様な子」「お子さん」と表現されている。小坊主の名は「珍珍齋」であるが、これも橋本の「珍五郎兵衛」から編み出したような名前である。最後の場面は、橋本訳ではテイラーの英訳を忠実に訳した内容になっているが、新井訳では和らげられた内容になっている。「小坊主は青い顔をして、パツと姿をかくしてしまひましたが、もう其後は、何事もなかつたと云ひます。」おそらく新井は、読者である子どもを意識して、残酷な表現を避けたのであろう。

訳者、新井弘城は本名を南部新一（1894-1986）という。京都府舞鶴市出身で立命館中学校を中退し、1915（大正 4）年に博文館に入社する。少年時代から巖谷小波に憧れていたからである。『幼年画報』『幼年世界』『少年少女譚海』などの編集を担当し、1928（昭和 3）年に博文館を退館する。その後、自ら「菁蘭社」を起こして出版人になる²⁸。新井弘城は南部が博文館に勤務していた頃の筆名で、戦後に児童文学者として活躍するときの筆名は南部亘国である。

新井は橋本訳を参考にしてこの話を書き下ろしたのではないだろうか。なせなら、彼の訳にはテイラー訳の改変部分と一致する箇所が多いからである。そのうえ橋本の日本語化を踏襲したような改変箇所も混在する。中学校を中退した新井には外国語力が不足していたと思われる。それゆえ彼は、既存の翻訳を参考に書き下ろすという手法を取ったのではないだろうか。

6) 南部修太郎譯「小人の謎」『赤い鳥』収録

6 番目の翻訳は 1918（大正 7）年 8 月である。雑誌『赤い鳥』1 巻 2 号に「小人の謎」という題名で収録されている²⁹。冒頭は下記の文で始まる。

或るところに、貧乏な粉ひきのお爺さんがをりました。そのお爺さんには、それは／＼綺麗な一人の娘がありました。
或日のこと、その國の主様が立派なお馬に乗つて、澤山のお供をつれて、そのお爺さんの家の側をお通りになりました。(52)

宮殿の部屋で藁を黄金に紡ぐよう命じられて、娘がわあわあ泣いていると、

可愛らしい小さな小人がひよこりとお部屋の中に這入つて来ました。
 小人は真赤な着物を着て、鳥の羽根の着いた青い帽子をかぶつてみました。
 顔には銀色の髪がふさ／＼と生えてみました。(53)



【図3 清水良雄画 南部修太郎訳】

3 回目はお礼の品物として、小人は後に「一番目のお子様を私に下さい」と言う。1年後、王妃は「美しい男の子」を生む。さらに1年後に小人が現れて「お子さまを下さいまし」と言う。王妃が「おんおん泣く」と、小人は 3 日の間に自分の名前を当てたら子どもは連れて行かないと約束する。

王妃が小人の名前は「フラムシカ」だと言うと、「小人はがっかりして、真青になって、こそ／＼遁げて行ってしまひました」で終わる。

「フラムシカ」という語について調査すると、この単語が出現する本を見つけることが出来た。ポレヴォイ訳“Сказки, собранные братьями Гримм”（グリム兄弟の昔話集）である。この本はピョートル・ニコラエヴィチ・ポレヴォイ（Пётр Николаевич Полевой 1839-1902）が1895年にグリム童話をドイツ語からロシア語に訳したものである。底本はグロート・ヨハン（Grot Johann 1841-1892）とアントン・ローベルト・ラインヴェーバー（Anton Robert Leinwerber 1845-1921）の挿絵入りで、1892年に出版されたドイツ語の本である³⁰。フラムシカ（Хламушка）はロシア語で「ちっぽけなゴミ」という意味で、小人の名前に使用されている³¹。ここでは王妃が産む子は“ребёнок”（赤子）であり、男の「王子」とは表記されていない³²。そのうえ最後の場面も、「小人は怒りのあまり両手で左足をつかんで、まっぷたつに自分の体を引き裂いた」とドイツ語原典に忠実に訳されている³³。一方、南部は「小人はがっかりして、真青になってこそ／＼遁げて行ってしまいました」と大幅に和らげた表現にしている。南部が底本にグリム童話のロシア語訳を使用したのは、彼が慶應義塾大学でロシア文学を専攻したからであろう。しかし、彼は底本に忠実に訳すのではなく、小人の服装を色彩豊かにし、結末を穏やかな表現に変えたのである。おそらく『赤い鳥』の読者である子どもたちを意識した独自の判断であろう。あるいは、ロシア語圏の絵本の挿絵を見てカラフルな小人に改変したのかもしれない。なぜなら時代は下るが、1985年出版されたハンガリーの画家、ポール・ガルトン（Paul Galdone 1914-1986）の絵本には青い服を着て羽根付きの赤い帽子を被った小人が出現するからである。



【図4 ポール・ガルトン絵 乾有美子訳】

南部修太郎（1892-1936）は土木技師の父常次郎の長男として宮城県仙台市で生まれる。父の転勤で東京、神戸、熊本、博多、長崎に移住するが、1905（明治38）年の春、再び東京に戻り、麻布区新龍土町十二の家から芝中学校に通う。1912（明治45）年に慶應義塾大学に入学し、文学科露文学を専攻する。1917（大正6）年に大学を卒業し、以後1920（大正9）年まで『三田文学』の編集主任を務める。芥川龍之介を師と仰ぎ、小島政二郎、滝井孝作、佐佐木茂索とともに「龍門の四天王」と呼ばれるが、1936年6月22日、43歳（満年齢）の若さで逝去する³⁴。

7) 金田鬼一譯「がたがたの竹馬小僧」『グリム童話集 第一部』収録

7 番目の翻訳は1924（大正13）年8月である。「世界童話大系 第二巻獨逸篇」として出版された

『グリム童話集 第一部』に「がたがたの竹馬小僧」という題名で収録されている。冒頭文を紹介する。

むかし昔、粉挽こなひきがありました。粉挽は貧乏でしたけれども、美しい娘を一人持つて居りました。この粉挽こなひきが或る時王様と話をしたことがありました。そのとき、粉挽はちょっと威張つてみたかったので、王様に向つて、「わたくしは娘を一人もつて居ります。この娘はむら藁をつむいできん黄金に致します」と申しました。(368)

読みやすい日本語で訳されており、内容も原典に忠実である。小人は「豆のような男」や「一寸法師」と訳されている。3 回目に一寸法師が要求するのは後の「一番はじめの兒」であり、性別は不明である。小人の名は「ガタガタの竹馬小僧」と訳されている。

“Rumpelstilzchen” は“Etymologie” (ドイツ語語源事典) には“rumpelnder Kobold” (ガタガタさせる小人)、“Poltergeist” (ごとごと音を立てる家霊)、“Hinkender” (足を引きずる者) という意味を持つ語であると記されている³⁵。語源が「がたがたさせる小人」という意味であるとすれば、「がたがたの竹馬小僧」という金田の訳は日本語としては名訳といえる。

翻訳者、金田鬼一 (1886-1963) は東京府出身で、京華中学校から第一高等学校を経て、1909 年東京帝国大学文学部独文科を卒業する。その後ドイツ帝国に留学中、第一次世界大戦勃発のため留学期間を短縮して、1914 年 10 月 20 日に帰国する。第四高等学校教授の後、学習院高等科教授となる³⁶。1954 年から 1956 年にかけて『完訳グリム童話集』全 7 冊を刊行し、グリム童話集を全訳した最初のドイツ文学者である。彼の翻訳は原典に忠実であるだけでなく、日本人に理解できないドイツ語の表現をできるだけかみ砕いて、日本語に直そうとしたものである。

第 3 章 上記の翻訳の改変点のまとめ

1. 改変点一覧表 (太字表記は原典と大幅に異なる表現)

	父親の身分	嘘をつく理由	娘の描写	援助者	赤子性別	小人の名	教えた人	入れ智恵者	小人の最後
原典	貧乏な粉屋	王に取り入る	美しい	小人	赤子	ルンペルス ティルツヒェン	使い (男)	悪魔	左足を掴んで、体を二つに引き裂く
1)	憐れな水車師 愛柳子	貧しさを脱し利益を得る	美しい	小さき人	息子	ランプイルス テルトスキ	使者 (男)	悪魔	右足がちぎれ、唸り跳び去る
2)	貧乏な百山君 姓	奉公に出す厄介払い	無精者	小人	王子	癡杖子	家来 (男)	悪魔	左足を真ん中から折る
3)	粉屋 橋本	自慢したくて	美しい 行き届き 伶俐	一寸法師	子供	珍五郎兵衛	使者 (男)	誰か	左足を引き抜き、立ち去る
4)	貧乏な水車屋 中島	気に入られようと	美しい	矮人	王子	ルムペルス チルツヘン	使ひ (男)	魔女	右脚が外れて、片足で逃げる
5)	粉屋 新井	嘘八百言う	賢い	小坊主	子供	珍珍斎	家来 (男)	なし	青い顔で姿を消す
6)	貧乏な粉屋 南部	娘自慢したくて	綺麗	小人 赤い着物 青い帽子	男子	フラムシカ	家来 (男)	なし	真っ青になり、ここぞ逃げていく
7)	貧乏な粉屋 金田	威張つてみたくて	美しい	豆のような男	小兒	ガタガタの 竹馬小僧	使者 (男)	悪魔	左足を掴んで、自分の体を二つに引き裂く

2. 表の分析と考察

1) 父親の身分と嘘をつく理由

粉屋が百姓に変えられているのは、山君（森於菟・鴟外）訳のみで、原典では父親は王に取り入り、娘を取り立ててほしいと願って嘘をつくが、山君訳では貧乏な百姓の口減らしのため、厄介払いとして娘を城に奉公に出す。合理的に考えると、この方が的を射た解釈と思われる。なぜなら父親の見栄から出た嘘は、娘の命を奪うことにもなるからである。1 番目の愛柳子訳では父親の身分は変更されていないが、王に嘘をついたのは、あまりに貧乏なので利益を得ようとしたからとされている。山君訳の「口減らしのために、厄介払いした」という解釈は、先行訳を拡大解釈したものという見方も成り立つ。

2) 娘に関する描写

「美しい」娘とされているのは 5 話、「賢い娘」とされているのは 2 話、「無精者」とされているのが 1 話である。無精で怠け者だから娘を厄介払いしようとするのは森於菟（森鴟外）訳である。賢い娘を自慢するのは新井訳で、嘘八百並べて王が娘を城に呼ぶよう仕向ける。美しい娘も、賢い娘も、怠け者の娘も、泣くと必ず男の救助者（小人）が現れ、娘を窮地から救ってくれる。娘の涙は自らの窮地を救う「武器」の役割を果たしているのである。

3) 小人の邦訳

小人は小さき人、一寸法師、小坊主、豆のような男と形容されているが、美しい娘からみたら、この男は外面的には非常に小さな存在であるというメタファーではないだろうか。娘から首飾り、指輪、赤子を欲しがるという行為は、まるで「婚約者」でもあるかのようだ。小人は娘に対して好意を抱いていたにちがいない。感情表現を知らないメルヒェンでは、品物や行動で感情が表現される。藁を金に紡ぐという困難な仕事を代行した時点で、小人は娘自身を狙っていたのではないだろうか。実際、ジェイコブズ（Josef Jacobs 1854-1916）が 1890 年に収集したイギリスの異型「トム・ティット・トット」（Tom Tit Tot）では、小人は娘に「あんたをいただく」（you shall be mine）と言うのである³⁷。

4) 子どもの性別

生まれてくる赤子の性別はグリム版の初稿では王子になっていたが、初版以降は決定版まで常に性別不明の「最初の子ども」という表現になっている。しかし、日本語訳では 7 話中 4 話で男児、つまり、後継者である王子にしている。日本では江戸時代までは相続法というものがなく、「お家騒動」が起こることもあったが、1873（明治 6）年 7 月 22 日に太政官布告第 263 号が發布されて、華族や士族に対して長男の家督相続制が歴史上始めて法的に規定される³⁸。翌年 12 月 28 日にはその規定は「平民にも適用」される³⁹。それゆえ、明治期や大正期には長男の価値がこれまでになく重視されるようになったのである。ドイツ語の原典では「第一子」としか書かれていないのに、日本語訳になると「王子」と男児に訳されるのは、上記のような日本の社会的状況を反映した結果であろう。

5) 名前を教えた人

森の中で偶然小人の名前を聞いて、それを後に伝えるのはグリム童話の初稿では「召使の女」であ

るが、初版になると「王」になり、第2版以降ではすべて男性の「家来」か「使者」になる。問題の解決策を教えてくれる使者は、すべて男性ということになる。日本語訳でも7話すべてで、男性の家来が教えることになっている。

6) 小人の名前

小人の名前に関しては、ドイツ語をそのまま「ルムペルスチルツヘン」と訳出しているのが中島訳で、その英語読み「ランプイルステルトスキン」を入れているのが愛柳子である。面白いのは「ちっぼけなゴミ」という意味のロシア語「フラムシカ」が使われていることである。南部がポレヴォイのロシア語訳からグリム童話を重訳したからであろう。

森於菟は癡杖子（はいじょうし）と訳しているが、これは漢文で考えると、「杖を亡くした子」「見捨てられた子」という意味であろう。虚勢張っていた小人が、名前を当てられたことによって本性が暴かれ、支えとなる杖（力）を喪失し、見捨てられることを暗示した名前と解釈できる。おそらく父親の森鷗外が添削の際に入れた名前であろう。漢文の素養に富んだ森鷗外ならではの命名といえよう。

エドガー・テイラーの英語訳を底本に使った橋本は、「珍五郎兵衛」と日本語化した名前に置き換えている。ヘルバート学派はグリム童話を日本の風土に合うよう改変する手法も駆使しており、橋本は「猟師とその妻」では妻の名を「イルゼビル」から「女房のお六」に⁴⁰「忠臣ヨハネス」は「忠臣六郎」に、「老犬ズルタン」は「ポチ」に題名変更している⁴¹。新井の「珍珍齋」は橋本の名づけ方を参考にして付けたものと考えられる。原文に忠実な訳を心掛けた金田は“Rumpelstilzchen”の語源を調査し、「ガタガタ音を立てる家霊」であることを確認したうえで、「ガタガタの竹馬小僧」と訳したと思われる。その結果、小人の名は西洋の言葉で表現されたものが3話、日本語に直されたものが4話ということになる。

実名を当てられると、自ら命を絶つ小人の行為にはどのような意味が含まれているのだろうか。フレイザー（James George Frazer 1854-1941）は、オーストラリア原住民の諸部族は「異人が彼の秘密の名を知れば呪術によって彼に被害を加える特殊な力を獲得する」と信じていたと報告している⁴²。また、古代エジプト人は2つの名前を保持し、小さな名を公開し、真の名である大きな名を秘匿したという⁴³。日本でも平安朝の貴族女性、紫式部、清少納言、和泉式部などは父の職名などに因む「^{そうろうな}候名」で称され、実名は不明のままである⁴⁴。このように実名回避の慣習は古代や中世の社会ではかなり広範囲に見られたものであった。それゆえ、「秘密の名を知れば、その事物や人間も支配することが出来るという話」が、多くの民話や伝説に存在するのである⁴⁵。

7) 小人の最後の退出場面

名前を言い当てられた小人は原典では「左足を掴んで、自分の体を二つに引き裂く」のだが、この部分を原典に忠実に訳しているのは⑦金田のみである。①愛柳子②山君④中島の3話では、片足が抜けて、もう一方の足で跳び去る。③橋本の話では小人は身体的損傷を受けず、精神的侮辱のみを受ける。床にのめり込んだ片足を両手で引き出し、人々に笑われながら立ち去るのである。⑤新井⑥南部の2話では身体的損傷も精神的侮辱も受けず、小人は青い顔をして立ち去るとされている。②山君訳でも同様に、残酷な結末を回避した表現になっている。山君はドイツ語版を底本にして訳したので、改変はおそらく添削者である森鷗外によるものであろう。しかし、その改変内容が英語版の結末と同じ内容になっているのは、前述したように、先行訳である①愛柳子の訳を参考にしたからではないだ

ろうか。愛柳子は底本としてウェーナートの英訳本を使用したと思われる。同様に、③橋本訳や④中島訳の改変も、英語訳の内容を踏襲したものになっている。下記にウェーナート英訳と④中島訳を併記する。

Wehnert: “his right came off in the struggle, and he hopped away howling terribly” (162)

中島: 右の脚は関節から抜けて、矮人は恐ろしい聲で吠えながら、片足跳かたあしとびに跳んで行った。(172)

③橋本訳もテイラーの底本での改変を踏襲していることは、3章2.3)で詳述している。⑥南部の「真青になってこそ／＼遁げて行ってしまいました」という改変は、前述したロシア語の底本によるものではなく、訳者によってなされたものである。⑤新井の「青い顔をして、パッと姿をかくしてしまひました」という改変は、彼によるものなのか、使用した底本によるものなのか、詳細は不明である。翻訳内容から判断すると、①橋本訳を参考にして日本語化した可能性が高い。

結論

明治期から大正期の間、この話の翻訳は合計で7話出版されている。そのうちドイツ語から訳されたものは2話、英語訳から3話、ロシア語訳から1話、底本が不明のものが1話である。改変箇所は、英語訳の影響を受けたものが多く、ドイツ語原典に忠実な訳は金田鬼一訳だけである。グリム童話の他の話では忠実に訳している山君(森於菟)も、この話では改変を加えている。

父親が嘘をついて王に差し出す娘は、「美しい」から「賢くて、気が利く」娘に改変されるが、これはテイラーの英語版による改変であり、日本で変えられたものではない。娘が無精者だという改変は山君によるものなので、日本で変えられたものである。山君はこの話を貧しさゆえの子捨ての話に改変したのである。

小人の名前については、ルンペルシュティルツヒェンと原典の名前を使っているものが2話、ロシア語の名前が1話、日本語の名前が4話存在する。おそらく日本人の読者にわかりやすいように、日本語化されたのであろう。

娘を救済に導くのは、まず、自らの涙である。大声で泣くと男性の救済者が出現して、娘に力を貸してくれる。グリム童話のなかでは困難に直面しても逃げ出さず、涙を流しながら向き合うと、必ず救済者が現れる。ここでは小人という男性の救済者が現れ、問題を解決してくれる。つまり、涙は娘が問題を解決する「手段」なのである。涙を出すと、負の感情が分散して、悲しみが分散するだけでなく、「相手の援助や同情を引き出す」という科学的分析も存在する⁴⁶。とくに若く美しい女性が涙を流すと、男性は精神的に動揺して助けようとする。この話でも美しい娘が大声で泣くと、男の小人は同情して、仕事を代行してやったり、約束の期限を延長してやったりする。まさに「涙は女の武器」になっているのである。

名前を当てられた小人は最後の場面で、原典では自ら体をまっぷたつに引き裂くのだが、この部分は金田訳を除いて、すべて改変されている。なぜなら、底本に使った英語訳に改変が施されていたからである。英語訳では「片足が抜けて、もう一方の足だけで跳んで行った」や「人々に大笑いされながら立ち去った」と表現されている。なかには、日本人訳者が残酷であると判断して改変したものも存在する。ロシア語訳から重訳した南部は、「真青になって、こそこそ逃げていった」と身体的損傷も精神的侮辱も与えない表現に改変しているが、これはロシア語の底本にはない表現である。おそら

く南部本人が施した改変であろう。

日本人訳者による独自の改変は、生まれたこどもの性別を男性化したことである。「最初に生まれた子」としか表現されていないのに、「王子」や「息子」という言葉に置き換えて、最初に生まれた子は、後継者である男児と決めつけているのである。1873（明治6）年の太政官令で、華士族に対して長男の家督相続制が、日本史上初めて法的に明確化された。江戸時代まではそのような「相続法」は存在しなかったため、明治期や大正期は日本史のなかで長男の価値がもっとも重要視された時代といえる。そのことがこの改変部分から如実に読み取ることができるのである。

明治期や大正期に訳出されたグリム童話「ルンペルシュティルツヒェン」の訳文を分析し、改変点に焦点を当てて考察することによって、この時期の日本が外国の文化をどのように取り入れて、どのように改変したかということが明らかになった。グリム童話の翻訳はドイツ語からではなく、主として英語訳から重訳されていた。児童雑誌『赤い鳥』に紹介されたものは、これまでイギリス民話を英語から訳したものとされていたが、グリム童話のロシア語訳から重訳されたものであるということが判明した。これらの発見が今後のグリム童話の受容研究の一助となれば幸いである。

注

- 1 『グリム童話集』（*Kinder- und Hausmärchen*）は KHM と略記し、その後に決定版の番号を表記して表示する。
- 2 ハンス＝イェルク・ウター著 加藤耕義訳『国際昔話話型カタログ』原書房 2011年 240頁
- 3 同上、Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Hrsg. v. Hans-Jörg Uther. München: Diederichs 1996, S. 111.
- 4 西口拓子「森鷗外・森於兎共譯『しあはせなハンス』」『専修大学紀要』2012年 334-345頁
- 5 川戸道昭／野口芳子／榊原貴教『日本におけるグリム童話翻訳書誌』ナダ出版センター 2000年 233頁。
- 6 7版(決定版 1857) Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Hrsg. v. Heinz Röllele. Stuttgart: Reclam 1980, S. 285-287. 拙論で引用する決定版の内容は、すべて上記の原典からの拙訳である。
- 7 Röllele, Heinz: *Die Älteste Märchensammlung der Brüder Grimm*. Cologne-Genève: Bodmer 1975. S. 379-380.
- 8 Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Hrsg. v. Hans-Jörg Uther, a. a. O., S. 111.
- 9 Ebd.
- 10 2版 (1819) Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Hrsg. v. Heinz Röllele. Köln: Diederichs 1982. Bd.1, S.197-199.
- 3版(1837) Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Hrsg. v. Heinz Röllele. Frankfurt/M: Deutscher Klassiker 1983. S. 250-253.
- 4版(1840) Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Göttingen: Dieterich 1840. S. 333-336.
- 5版(1843) Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Göttingen: Dieterich 1843. S. 328-331.
- 11 6版(1850)Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Göttingen: Dieterich 1850. S. 326-329.
- 12 初稿(1810)Röllele, Heinz: A. a. O., S. 238-240. 左記初稿のドイツ語を要約して拙訳。
- 13 初版(1812)Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Hrsg. v. Friedlich Panzer, Wiesbaden: Vollmer 1953. S. 204-206 左記初版のドイツ語を要約して拙訳
- 14 引用文は日本語文献も外国語文献も、() 内に引用文献の頁数を数字のみ記入して表記する。
- 15 原典と表現するときにはすべて、グリム版の決定版(注6)を指す。
- 16 寺澤巖男「児童・少年期に於ける讀物の重要性」『教育學研究』11(6) 1942年 426頁。
- 17 浅岡邦雄「明治期博文館の児童向け出版物のめざしたもの」<ラウンドテーブル>『児童文学学会報告』⑦「明治期児童出版の雄、博文館」2015年 11月 15日作成サイト。
<https://nekopapaan.fc2.net/blog-entry-1012.html> 閲覧日 2021年 8月 23日
- 18 *Household Stories* Collected by the Brothers Grimm. Newly translated. Illustrations by E. H. Wehnert. New edition. London: Routledge and Son 1861. S. 162.

- 19 扱「さて」「ところで」話題を変えるときに言う語。鎌田正/米山寅太郎『新漢和辞典』大修館書店 1980年 362頁。
- 20 森鷗外/森於菟共譯『しあはせなハンス』文藝春秋新社 1948年 あとがき 1頁。
- 21 同上、2頁。
- 22 同上。
- 23 西口拓子 前掲書 333-342頁。
- 24 『20世紀日本人名事典』2巻 日外アソシエーツ 2004年 1977頁。
- 25 *German Popular Stories*. Edited by Edgar Taylor. London: John Camden Hotten 1861. S. 148-151.
- 26 Ebd. S. 149. Taylorは「最初の子」(your first little child)と英訳している。
- 27 日本児童文学学会編『児童文学事典』東京書籍、1988年、536-537頁。
- 28 大阪国際児童文学館編『南部新一記念文庫目録 雑誌の部(和書)』大阪国際児童文学館 1992年 序。『20世紀日本人名事典』1巻 日外アソシエーツ 2004年 102頁。
- 29 この話は『赤い鳥研究』ではイギリス民話「トム・ティット・トット」の翻案とされているが、間違いであることが判明した。渡辺茂男「赤い鳥と外国文学」日本児童文学学会編『赤い鳥研究』小峰書店 1965年 160頁。
- 30 *Kinder- und Hausmärchen*. Gesammelt durch die Brüder Grimm. Mit Illustrationen von Phillip Grot Johann und Robert Leinweber. Stuttgart: DVA 1892.
- 31 Пётр Николаевич Полевой: *Сказки, собранные братьями Гримм*. Маркса: Санкт-Петербург Издание А. Ф. 1895, S. 168, 170.
- 32 Ebd. S. 168.
- 33 Ebd. S. 170.
- 34 赤い鳥事典編集委員会編『赤い鳥事典』柏書房 2018年 201頁。
- 35 *Etymologie*. Duden Bd.7. Mannheim/Wien/Zürich: Dudenverlag 1989, S. 603.
- 36 『20世紀日本人名事典』日外アソシエーツ 1巻「あ～そ」2004年 731頁。
- 37 Jacobs, Josef: *English Fairy Tales*. London: David Nutt 1890. S. 4.
- 38 石井良助『日本相続法史』創文社 1980年 91頁。
- 39 同上 92頁。
- 40 橋本青雨訳「漁夫の妻」『独逸童話集』所収 大日本国民中学会 1906年 18頁。
- 41 同上 目次 1頁。
- 42 ジェームス・G. フレイザー著 永橋卓介訳『金詩篇』第2巻(1952)年 岩波書店 191頁。
- 43 同上 912頁。
- 44 豊田国夫『名前の禁忌習俗』講談社学術文庫 1988年 65頁。
- 45 同上 66頁。
- 46 ウィリアム・H・フレイ 2世 ミュリエル・ランセン著 石井清子訳『涙一人はなぜ泣くのか』日本教文社 1990年 197頁。

図版説明

- 図 1: 画家不明 愛柳子訳『幼年雑誌』1巻13号 博文館 1891年 35頁 梅花女子大学図書館蔵
- 図 2: 岡本帰一絵 中島孤島訳『グリム御伽噺』富山房 1916年 165頁 岐阜大学図書館蔵
- 図 3: 清水良雄絵 南部修太郎訳『赤い鳥』1巻2号 1918年 57頁 梅花女子大学図書館蔵
- 図 4: ポール・ガルトン絵 乾侑美子訳『ルンペルシュティルツヘン』1994年 表紙 野口芳子蔵